

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

地方都市岡山における精神科救急入院棟の現状と課題
——スーパー救急入院棟で何ができているのか——来住 由樹, 高木 学, 高橋 正幸, 竹中央, 中島 豊爾
(岡山県精神科医療センター)

岡山県精神科医療センターは、人口200万人の岡山県全域を診療圏として、精神科救急入院棟を運営している。県内を2圏域にわけた輪番制と、そのバックアップ病院として機能しているが、2圏域に分けることは、生活圏域から無理があり、結果として、休日夜間の行政精神科救急の79%が当院へ入院している。救急急性期入院棟の役割は、入院棟が機能分化し、依存症と児童精神科対象者については、直接専門棟へ入院することにもない、より特化される状態にある。一方で50床の病床に月40名程度の新規入院があるため、入院受け入れのためのベットコントロールが優先し、環境の変化に脆弱な入院者の院内再燃の問題

が課題となっている。入院者数の最も多い統合失調症において、急性期の適時入院への配慮はなされた上で、慢性化させないための工夫、病識づくりほか治療継続のための介入、家族の疾病理解のための介入、入院医療と外来医療との落差のない移行などが課題となるが、その解決への試みはまだ途上である。また多彩な疾患群のそれぞれに、安全保障の提供と薬物療法以外の必要な治療がどこまで提供されているかも課題となる。当日は、退院後の治療継続や再入院率ほか、予後にかかわる分析をおこない、今後必要な病棟運営上、および治療上の課題を検討したい。

(この論文は抄録集より転載しました)